

けいせいあわ なると

傾城阿波の鳴門

〔解説〕明和五年（一七六八）六月、竹本座初演。近松半二、竹本三郎兵衛、八民平七らの合作。夕霧伊佐衛門を題材にした近松門左衛門の「夕霧阿波鳴渡」をもとに、阿波徳島、玉木家のお家騒動を絡ませたものです。当時、阿波の浪人が、大坂玉造に仮住まいをして、詐欺・ゆすり・追いはぎなどを働いていた。ある日、順礼の子が、金を持っていくのを知り、だまして家に連れ帰り、深夜しめ殺して、死体を畑へ埋めた。しかしこれが露見したため、召し捕られ、重罪に処せられた、という実説を取り入れています。

〔あらすじ〕阿波徳島玉木家の若殿が遊女におぼれているのに乗じて、悪家老の一味はお家横領を企てていました。同じく家老の桜井主膳はこの状態を憂えていたのですが、預かっていたお家の重宝「国次（くにつぐ）」の刀を盗まれてしまいます。この刀の探索の為、家臣十郎兵衛は、銀十郎と名を変えて、妻お弓とともに盗賊の仲間に入ります。「順礼歌の段」ある日、十郎兵衛の留守に、順礼の子が門口にやってきました。お弓は、話を聞くうちに、国元に残してきた娘のおつるとわかりますが、親子と名乗ると盗賊の罪が娘にかかることを恐れ、一旦は追い返します。しかし、今、別れてはもう二度と会うことが出来ないと思い直し、おつるの跡を追います。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

順礼歌の段

へふるさとを、遙々こゝに、紀三井寺。

「順礼に御報謝」

と、言ふも優しき国訛。

「テモしほらしい順礼衆、ドレドレ報謝進ぜう」

と、盆に白米の志、

「アイアイ、有がたうござります」

と、言ふ物腰から棲外れ、

「可愛らしい娘の子、定めて連れ衆は親御達、国はいづく」

と尋ねられ、

「アイ、国は阿波の徳島でござります」

「何ぢや徳島、さつてもそれは、マア懐しい。わしが生れ

も阿波の徳島、そして父様や母様と一緒に順礼さんすのか」

「イエイエ、その父様や母様に逢ひたさ故、それでわし一

人、西国するのでござります」

と、聞いてどうやら気にかゝる、お弓は猶も傍に寄り、

「ム、父様や母様に逢ひたさに、西国するとはどうした

訳ぢや、サそれが聞きたい、言ふて聞かしや〜」

「アイ、どうした訳ぢや知らぬが、三つの年に父様や母様

も、わしを婆様に預けて、どこへやら往かしやんしたげな。

それでわたしは婆様の世話になつて往たけれど、どうぞ父

様や母様に逢ひたい、顔が見たい。それで方々と、尋ねて

歩くのでござります」

「ム、シテその親達の名は何というぞいの」

「アイ、父様の名は十郎兵衛、母様はお弓と申します」

と、聞いて吃驚^{びっくり}り、

「ア、コレコレ、アノ父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つ

の年別れて、婆様に育てられてゐたとは、疑ひもない我が

娘」

と、見れば見る程幼顔、見覚えのある額^{ほくろ}の黒子、

「ヤレ我子か、懐しや」

と言はんとせしが、『待て暫し。』

「オ、それはまあまあ、年端も行かぬに遙々の所を、よう尋ねに出さつしやつたのう。その親達が聞いてなら、さぞ嬉しうて／＼飛立つ、サア、飛立つ様にあらうが、儘ならぬが世の憂きふし。身にも命にもかへて、可愛い子を振り捨て、国を立退く親御の心。よくよくの事であらう程に、酷い親と必ず必ず恨みぬがよいぞや」

「イエ／＼勿体ない、何の恨みませう。恨みる事はないけれど、悲しい事は一人旅ぢやて、何処の宿でも泊めてはくれず、野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては、た、た、叩かれたり。怖い事や悲しい事も、父様や母様と一所にいたりや、こんな目には逢ふまい物を、何処にどうしてあやしやんすぞ。逢ひたい事ぢや逢ひたい事ぢや、逢ひたい」

と、わつと泣き出す娘より、見る母親はたまり兼ね、

「オ、道理ぢや、可愛や、いぢらしや」

と、我を忘れて抱き付き、前後正体嘆きしが。

「オ、段々の様子を聞き、我が身の様に思はれて、悲しいとも情ないとも、言ふに言はれぬ事ながら、兎角命が物種。

まめでさへありや、又逢はれまい物でもない。コレ、仕付けぬ旅に身を痛め、煩ひでも出りや悪い。何処をしやうどに尋ねうより、その婆様の方へ去んでみると、追付け父様や母様が逢ひに往てぢや程に、悪い事は言はぬ、悪い事は言はぬ、なんの又このおぼが、わが身の為にならぬ事を言ふてよいものか、わが身の為にならぬ事を言ふてよいものかいの。思ひ直して、これから直ぐに国へ去んで、随分まめで親達の尋ねて行かしやるを待つてゐるのがよいぞや」
と言ひつゝ内へ針箱の、底を探して豆板の、まめなを喜ぶ
餞別と、紙に包んで持つて出で、

「コレ、何ぼ一人旅でも、たんと銭さへやりや泊める。わづかなれども志、この金を路銀にして、早う国へ去にや、や、必ずく煩ふてばしたもんな」

と、金を渡せば押し戻し、

「アイ、嬉しうござんすれど、金は小判といふ物を、たと持つてをります。そんなりやまうさんじます、忝なうござります」

と、泣く泣く立つを引きとゞめ、無理に持たして塵打ち払ひ、

「コレ、もう去にやるか、名残りが惜しい、別れとむない、コレ、今一度顔を」

と引き寄せて、見れば見る程胸迫り、離れ難なき憂き思ひ、それと知らねど誠の血筋、名残り惜げに振り返り、

「どこをどうして尋ねたら、父様や母様に、逢はれる事ぞ、逢はしてたべ、南無大悲の観音様」

父母の、恵みも深き粉川寺

泣く泣く別れ行く跡を、見送り見送り延び上り、

「コレ娘、ま一度こちら向いてたも、ま一度こちら向いてたもいの。折角長の海山越え、艱難してあこがれ尋ぬるいとし子に、不思議と逢ひは逢ひながら、名乗らで退かす母が気は、どの様にあらうと思ふ、狂気半分、半分は死んでゐるわいの。まだ生い先のある子をば、親故路頭に立たすか」

と、その儘そこにどうと伏し、消え入るばかり嘆きしが。起き直つて涙を押へ、

「イヤイヤ、どう思ひ諦めても、今別れては又逢ふ事はならぬ身の上、たとへ難儀がかゝらばかゝれ、又その時は夫の思案、程は行くまい追付いて、連れて戻らう。さうじや、さうぢや」

と子に迷ふ、道は親子の別れ道、後を慕つて